



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Ю. Оレーша 『羨望』の草稿研究 : カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いをめぐって
Author(s)	古宮, 路子; Комия, Митико
Citation	スラヴ研究, 63, 111-131
Issue Date	2016-06-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/84233">https://hdl.handle.net/2115/84233</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	63-04_pp.111-131.pdf



[研究ノート]

## Ю. オレーシャ 『羨望』 の草稿研究

—— カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いをめぐって ——

古宮路子

## はじめに

Ю. オレーシャ (1899–1960) の代表作『羨望』は、分量の上では決して大きいとはいえない作品だ。オレーシャ自身、そのジャンルをポーヴェスチ (中編小説) と呼ぶこともあれば、ロマン (長編小説) と呼ぶこともあるし<sup>(1)</sup>、同時代の文芸批評家の間でも、この作品をポーヴェスチとするかロマンとするかでは見解が分かれている<sup>(2)</sup>。そうした、大きな中編小説、あるいは小さな長編小説といった規模の作品であるにもかかわらず、オレーシャは完成までに、1922年頃から1927年6月頃までの、およそ5年半という歳月を費やした。

オレーシャは『羨望』の執筆期間の内訳について「事実上は半年だ。しかし、個々の断片には5年間かけた」<sup>(3)</sup>と述べている。現在、『羨望』の草稿が保存されていることで知られている、ロシア国立文学芸術文書館 (РГАЛИ) 所蔵の『羨望』のアーカイヴ資料の中には、手書きで、「Полный ч(е)рновик Зависти / 1927. Февраль-Июнь / Москв(а)»<sup>(4)</sup> (『羨望』の完全な草稿 / 1927年。2月–6月 / モスクワ)。本稿は、以下、これを「完全な草稿」と呼ぶことにすると銘打たれた表紙と、その内容と思われる一連の頁が断片的に保存されている<sup>(5)</sup>。残っている「完全な草稿」の内容は、一部を除いて、公刊されたテキストにかなり近いものになっている。1928年に初めて出た単行本『羨望』では、最終頁に「モスクワ、1927年2月–6月」<sup>(6)</sup>という記載があるが、この日付は、「完全な草稿」に記されているのと同

1 Российский государственный архив литературы и искусств (РГАЛИ), ф. 358, оп. 2, ед. хр. 14. л. 1.

2 『羨望』が初めて公刊された際、雑誌『赤い処女地』の目次では、そのジャンルはロマンと書かれており、また、同時代の批評の中でも В. エルミーロフは、それをロマンと呼んでいる。しかし、Я. チェルニャークや、А. レジネフは、この作品に対する批評で、それをポーヴェスチと呼んでいる。Содержание // Красная новь. 1927. № 8. С. 253; Ермилов В. Буржуазия и попутническая литература // Ежегодник литературы и искусства на 1929 год. М., 1929. С. 71; Черняк Я. О «Зависти» Юрия Олеши // Печать и революция. 1928. № 5. С. 107; Лежнев А. Ю. Олеши. «Зависть» // Революция и культура. 1927. № 1. С. 98.

3 Олеша Ю.К. Беседа с читателями // Литературный критик. 1935. № 12. С. 154.

4 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 17, л. 1.

5 А. Игнатоваは、ロシア国立文学芸術文書館の所蔵資料のうち、РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 17として保存されている草稿の一部が、「完全な草稿」の内容に当たると推測している。Игнатова А.М. Роман Ю.К. Олеши «Зависть»: История создания; Опыт научного комментария: Дис. ... канд. филол. наук. М., 2006. С. 174–175.

6 Олеша Ю.К. Зависть. М., 1928. С. 141.

じものだ。このことは、オレーシャが、「完全な草稿」の完成をもって、『羨望』がほぼ完成したと考えていたことを意味するだろう。したがって、オレーシャが述べている「半年」とはこの「完全な草稿」を書くのに費やされた期間だと思われる。それに対し、「完全な草稿」よりも前に書かれたらしい『羨望』の草稿は、オレーシャが「個々の断片」と呼ぶように、どのような全体的ストーリーの一部をなしているのか定かでない、断片的なエピソードを描いた頁の集積になっている。オレーシャはこうした断章を書くにあたり、何度も冒頭から書き直して推敲を行ったようで、個々のエピソードにつき、幾通りものヴァリエーションが見受けられるものが大半を占める。つまり、1927年2月の段階で、オレーシャは執筆方法を変え、「個々の断片」に取り組むのをやめて、一気に『羨望』を完成へ持っていったものと思われる。

このように、『羨望』の執筆プロセスが2つに時期に大きく分かれることはわかっているが、作品の生成過程について、詳しいことはあまり明らかになっていない。その背景として、オレーシャは草稿にめったに日付を付さず、また、ノートではなく紙片に書いており、さらには原稿の内容も断片的なものだったため、草稿の頁が執筆の時系列に即して保存されず、どのような経過を辿って創作が行われたかを厳密に特定することが困難になってしまったことがある。こうした事情の下で作品の通時的な生成プロセスに関する研究を行った主な研究者に、И. Панченко、О. Ситарева、И. Озёрная、А. Игнатоваがいる。

パンченкоやシタレヴァは、生前のオレーシャの妻と交流があり、彼女が自宅で個人的に公開していたアーカイヴ資料を参照して研究を行った。パンченкоの「Ю. Оレーシャの長編小説『羨望』とその戯曲版『感情の陰謀』における調和的な個性の問題」(1974)は、アーカイヴ研究を主眼とするものではないが、記述の中には草稿の状況に触れた箇所もあり、そこでは、『無益な事物』と題された1章が現存する最初期のものであることが明らかになっている<sup>(7)</sup>。シタレヴァはアーカイヴ資料に全面的に依拠し、『ユーリイ・オレーシャの散文：創作の実験室と詩学の問題』(1975)を完成させた<sup>(8)</sup>。この研究では、『無益な事物』についての、パンченкоの見解が踏襲されているほか、公刊されたテキストには登場しないコースチャ・ベローフという人物が重要な役割を果たす内容の草稿が、作品の完成間近の時期を中心とする、比較的後期の段階のものであることが明らかになっている。ところで、パンченкоやシタレヴァが参照した『羨望』の草稿は、現在、ロシア国立文学芸術文書館に所蔵されているものとは異なるようだ。オレーシャのアーカイヴ資料は、妻の生前から一部が中央国立文学芸術文書館(ЦГАЛИ：現在のロシア国立文学芸術文書館の前身)に寄贈されており、死後はこの文書館が、さらにその大半を所蔵することになった。しかし、『羨望』の草稿に関して言えば、シタレヴァが論文の中で引証している資料には、ロシア国立文学芸術文書館の所蔵資料には見受けられない内容のものが多く、それと同時に、シタレヴァの論文は、例えば「完全な草稿」のような、ロシア国立文学芸術文書館所蔵に所蔵されている

7 Панченко И.Г. Проблема гармонической личности в романе Ю. Олеши «Зависть» и его драматургическом варианте «Заговор чувств» // Вопросы русской литературы. 1974. № 24. С. 33–39.

8 Шитарева О.Г. Проза Юрия Олеши (Проблемы творческой лаборатории и поэтики): Дис. ... канд. филол. наук. М., 1975.

資料の一部の存在を知らずに書かれていると思われる内容だ。つまり、パンチェンコやシータレヴァがオレーシャの妻のもとで閲覧した『羨望』の草稿は、われわれが現在、ロシア国立文学芸術文書館で参照できるそれとは異なるものだった可能性が高い。

И. オズョールナヤや А. イグナートヴァは、オレーシャの妻の死後に、中央国立文学芸術文書館（ロシア国立文学芸術文書館）の資料に基づいて研究を始めた。オズョールナヤは、それまで連続性に気づかれていなかった、『シャボン玉の日』という最初期に書かれた1章を構成する3つの断章が、連続してまとまりのあるストーリーを成していることを発見し、「ユーリイ・オレーシャのポーヴェスチ『羨望』の初期ヴァリエーションにおけるイヴァン・バービチェフの『いたずら』」（1989）で発表した<sup>9)</sup>。他方、イグナートヴァは「Ю.К. オレーシャの長編小説『羨望』：生成研究。注釈の試み」（2006）において、「完全な草稿」と、ロシア国立文学芸術文書館所蔵のタイプ原稿の比較対照を行い、タイプ原稿が「完全な草稿」から作成されたものであることを明らかにした<sup>10)</sup>。

こうして、『羨望』の生成プロセスについては、『シャボン玉の日』と『無益な事物』が現存している中では最初期のものであり<sup>11)</sup>、コースチャ・ベローフが登場するものが終盤に書かれたということ、そして、「完全な草稿」に基づいてタイプ原稿が作られたことがわかっているものの、それ以上のことはほとんど明らかになっていない。草稿を扱った研究は他にも存在するが、それらは、草稿の内容について論じているとはいえ、創作の過程を通時的に解明するというアプローチを行っていない。

また、創作プロセスが、最初の5年間と、「完全な草稿」以降に大別できることは明らかになっているものの、これらの二つの期間に書かれたものの関連性については、今後の研究が待たれる課題といえる。А. イグナートヴァは、両者の関係について「出版の文字通り半年前に、オレーシャは自分の草稿の素描から、登場人物の名前と、優れた比喻と、先行する歳月の仕事で首尾よく見出された場面だけを借用した、小説のテキストを、新しく書いた」<sup>12)</sup>と指摘し、最初の5年間に書かれた頁は「完全な草稿」ひいては公刊されたテキストには含まれておらず、前者は後者に何らかの要素として断片的に組み込まれているのみであることを強調している。このように、「完全な草稿」が心機一転して書かれたものであることはわかっているものの、最初の5年間に作られたものが、具体的にどのような形でそこへ組み込まれたかについてはまだあまり明らかになっていない。

本稿は以下、執筆の最初の5年間に書かれた草稿の中から、主人公カヴァレーロフと、彼が敵対する主要登場人物アンドレイ・バービチェフの出会いのエピソードを素材とし、それらがどのような過程をたどって生成したかということ、そしてまた、「完全な草稿」以降のテキストにどのように反映しているかを明らかにしていきたい。

9 *Озерная И.* «Штучки» Ивана Бабичева в первых вариантах повести Юрия Олеши «Зависть» // Литературная учеба. 1989. № 2. С. 158–169.

10 *Игнатова.* Роман Ю.К. Олеши «Зависть».

11 イグナートヴァによれば、『シャボン玉の日』と『無益な事物』のどちらが先に書かれたのかは不明だ。*Игнатова.* Роман Ю.К. Олеши «Зависть». С. 174–175.

12 *Игнатова.* Роман Ю.К. Олеши «Зависть». С. 174.

## 1. カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの対立の始まり

『羨望』研究において、この作品が2つの登場人物グループの対立の構図の上に成り立っているということは共通認識になっている。主人公のカヴァレーロフと、イヴァン・バービチェフ、そして時にはアーネチカ・プロコポヴィチを含めることもあるグループと、アンドレイ・バービチェフ、ヴォロージャ・マカーロフ、ヴァーリャから成るグループだ。両グループの対立の軸になっているのは、革命前の古い価値観と、新しいソ連社会の価値観の対立で、例えばJ. タッカーは、アンドレイ・バービチェフらのグループが「ごく親密で家庭的な行動さえも運命づける、完成されたソ連の未来に足を踏み入れている」のに対し、カヴァレーロフらのグループは「もつれた人間関係と個人的欠陥の世界という、革命前の世界に属している」と指摘している<sup>(13)</sup>。そして、こうした新旧の対立構図には、ほかの様々な対立項も複層的に重ね合わせられている。K. イングダールはそうした対立項として、「ロマンティックな個人主義と合理主義的集団主義」や、「芸術家と社会」といったテーマがあると指摘している<sup>(14)</sup>。そして、M. オヤが『『羨望』の中心的核となっているのは、古いロマンティックな世代を代表するカヴァレーロフと、新しい世代を代表するアンドレイ・バービチェフの対立だ<sup>(15)</sup>と述べているように、本稿が検証対象とする両者の対立は、作品の構図の中心に位置するものだ。

しかしながら、そのような二項対立図式は、執筆当初からオレーシャの構想にあったものではなかった。そればかりか、公刊されたテキストでは対立の中心的人物となっている主人公のカヴァレーロフもまた、当初は作品の主人公ではなかった。作品の根幹をなすこうした設定は、執筆の過程で徐々に導入されていったものだ。

現存する『羨望』の草稿の中で最も古い『シャボン玉の日』、『無益な事物』は、創作の早い段階でこの作品がどのようなものだったかを示している。それらにおいて、まず登場する主要登場人物はイヴァン・バービチェフ1人であり、彼が起こす騒動を中心に物語が展開する。つまり、最初期の『羨望』の主人公はイヴァン・バービチェフであり、そこに主要登場人物を二分する対立はなかったのだ。シータレヴァによれば、公刊されたテキストに登場する人物のうち、次に早い段階から草稿に現れるのは、イヴァンの兄弟のアンドレイ・バービチェフだ<sup>(16)</sup>。二人のバービチェフ兄弟は、当初から対立するものとして作り出されたようだ。パンチェンコは、イヴァンの作り出す「無益な事物」に対し、執筆のこの段階では造船技師という設定だったアンドレイが作り出すものを「有益な事物」と呼び、「これらの人物達は、生きた具体性の中で、物質的なものと理想主義的なものの対立という哲学的意味を帯びてい

13 Janet G. Tucker, "Jurij Olesha's Envy: A Re-examination," *Slavic and East European Journal* 26, no. 1 (1982), p. 56.

14 Kazimiera Ingdahl, *The Artist and the Creative Act: A Study of Jurij Olesha's Novel Zavist'* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1984), p. 9.

15 Matt F. Oja, "Yuriy Olesha's 'Zavist': Fantasy, Reality and Split Personality," *Canadian Slavonic Papers* 28, no. 1 (1986), p. 53.

16 Шутарева. Проза Юрия Олеши. С. 25–27.

たのだろう」<sup>(17)</sup>と指摘している。このように、アンドレイ・バービチェフがイヴァン・バービチェフの対立項として導入された時点で初めて、『羨望』に二項対立図式が導入されたといえる。

やがて、カヴァレーロフもまた『羨望』の登場人物に加えられることとなったが、当初、彼は主人公ではなく、あくまでイヴァン・バービチェフを主人公とする、バービチェフ兄弟の対立の物語の語り手として導入されたに過ぎなかったようだ。しかし、この人物は徐々に作中での存在感を増していき、主人公へと変化した。そのプロセスの一端をよく示しているのが、これから取り上げる、カヴァレーロフとアンドレイの出会いを扱ったエピソードだ。このエピソードは、「完全な草稿」および公刊されたテキストには含まれていないものの、多くのヴァリエントが残されており、オレーシャが試行錯誤を繰り返したという意味で、執筆過程において重要な意味をもつものだったといえる。そこには、執筆を進める中でオレーシャがカヴァレーロフとアンドレイの間の対立を先鋭化させていったことがはっきりと表れている。カヴァレーロフの作中での存在感は、まさにそうしたアンドレイとの対立構造の明確化を通じて強まっていった。以下、本稿では、そのようにして『羨望』の中でのカヴァレーロフの重要性が高まっていくプロセスを、草稿の個々のヴァリエントを検証しながら追っていく。各ヴァリエントは、解説の便宜上、論者によるアルファベットと番号を付して表記するものとする。

カヴァレーロフが、バービチェフ兄弟の対立の物語の語り手として『羨望』の構想に導入された時点では、アンドレイ・バービチェフはコミュニンの家<sup>(18)</sup>を建てた著名な建築家で、カヴァレーロフは彼の「文学秘書」という設定になっていた。

#### A-1

Начиная историю Ивана Бабичева, я задержу внимание читателя на личности его брата, известного инженера, строителя домов-коммун, Андрея Петровича Бабичева. / Я работал у него в качестве литературного секретаря.<sup>(19)</sup>

イヴァン・バービチェフの物語を始めるに当たり、僕は読者の注意を、彼の兄弟で、有名な技師で、コミュニンの子の建築家の、アンドレイ・ペトローヴィチ・バービチェフの人となり留めよう。／僕は彼のもとで文学秘書として働いていた。

『羨望』の公刊されたテキストでは、カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いのきっかけは、カヴァレーロフが酔って通りに倒れていたところをアンドレイ・バービチェフ

17 Панченко. Проблема гармонической личности. С. 34.

18 コミュニンの子とは、1920年代から30年代前半に、農村から都市へ大量に流入した労働者の若者たちの住宅問題の解決を主な目的として、ペトログラード（レニングラード）やモスクワをはじめとする各地に建てられた住宅。集団化された生活を営むためのものとして作られている点に、大きな特色がある。個人の居住空間が限定的なものになる一方で、共同の食堂、洗濯場、託児所、クラブなどの娯楽の場が設けられ、住人は共同生活を送った。コミュニンの子の建設が推進された背景には、新しい住環境によって「新しい人間」を作り出そうとするユートピア的発想があった。

19 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 6, л. 9.

フに助け起こされ、その家に連れてこられるというものだ。しかし、両者の出会いは、当初は、カヴァレーロフが知人を介してアンドレイに紹介されたことによるものとなっていた。手稿にはそのことを示す、表裏両面が書かれた一葉がある。その一方の面には、アンドレイ・バービチェフの「文学秘書」カヴァレーロフが、イヴァン・バービチェフについての物語を語ろうとしていることが書かれている。

#### A-2

Они стояли на вершине десятого дома, едва законченного постройкой — у амбразуры в крытой галлерее. В их обществе был я: литературный секретарь Андрея Бабичева, подчеркиваю это имя — не Ивана, чего историю я собираюсь писать, но Андрея<sup>(20)</sup> 彼らはやっと建設が終わった10番目の建物の最上階、屋根がついた回廊の窓のところにいた。彼らの中に僕がいた。アンドレイ・バービチェフの文学秘書だ。この名を強調する。僕が話を書こうと思っているイヴァンではなく、アンドレイだ

それに対し、もう一方の面には、カヴァレーロフが知人の紹介で「文学秘書」の仕事を得たことが書かれている。

#### A-3

Рекомендация ~~одного ответа~~ видного работника, знавшего меня по работе в одной из южных республик, дала мне возможность занять должность литературного секретаря у знаменитого инженера **Ивана** <Андрея> Бабичева. Подчеркиваю это имя: Андрея Петровича Бабичева.<sup>(21)</sup>

南の一共和国での仕事で僕を知っていた有名な人物の推薦で、僕は、有名な技師アンドレイ・バービチェフのもとで文学秘書の役目を務める可能性を得た。この名を強調する。アンドレイ・ペトローヴィチ・バービチェフだ。

一枚の紙の両面に書かれているということは、ヴァリエント A-2 と A-3 は時間的にごく近接し、連続して書かれたものと考えられる。ここから、イヴァン・バービチェフを主人公とする物語の語り手として導入された時点では、カヴァレーロフは知人の紹介でアンドレイ・バービチェフと出会い、「文学秘書」を務めているという設定だったことがわかる。

当初のカヴァレーロフが行っていた「文学秘書」の仕事とは、文学に詳しい知識人としての彼の教養を活かして、最新の作品を紹介するというものだった。

---

20 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 66об.

21 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 66. 以下、草稿で取り消し線が付されている部分を引用する際は、原文は取り消し線を付して表記するが、取り消されている箇所は訳さないものとする。また、オレーシャが取り消し線で消して、上に書き直している語については、< >内に表記する。

A-4

Мои обязанности ~~состояли в чтении и сводились к ежеднев~~ состояли в следующем: Я должен был следить за книжным рынком, отыскивая новинки, достойные ознакомления, прочитывать их, составлять конспекты и ~~ознакомлять с ними моего патрона~~ ~~Некоторые книги я чит~~ представлять их моему патрону. Он уделял внимание тому или другому произведению, лично прочитывая книгу.<sup>(22)</sup>

僕の仕事は次のようなものだった。僕は本の市場の動向を見て、目を通すに値する新作を探し、それらを読んで、概要をまとめ、僕のパトロンに示すことになっていた。彼はあれこれの作品に注意を向け、自ら本を読んでいた。

注目すべきは、こうした「文学秘書」だった時点では、公刊されたテキストにあるような、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフを妬み、憎むという設定がなかったらしいことだ。W. ウィルソンは公刊されたテキストについて、「Зависть（羨望）は、悪しき眼差しという発想に関連しているものと思われる。というのも、語源上、この語は видеть（見る）に関連しているからだ。この事実は、妬み深いカヴァレーロフに極めて適している。彼が『羨望』の第1部を語り、第2部の方向性もまた同様に左右するにあたり、彼の歪んだ意識は、大部分は視覚を通じて決定づけられている」<sup>(23)</sup>と指摘している。カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフを見る、羨望に歪んだ眼差しは、公刊されたテキストでは、作品のタイトルに関わる中心的なテーマになっているのだ。しかし、そうした要素は初期のヴァリエーションにはなかった。先に A-1 として挙げたヴァリエーションで、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフについてどのように語っているかを見てみよう。アンドレイ・バービチェフの活躍を語る調子に憎しみは感じられず、ニュートラルな語り方になっていることがわかるだろう。

A-1

Деятельность Андрея Бабичева известна всей России. Это был ~~любимец прави~~ фаворит правительства и кумир рабочих. ~~Он воздвиг во построил восемь домов-коммун для рабочего населения~~ Он построил восемь домов-коммун, восемь ~~грандиозных~~ <гигантских> рабочих общежитий. Теперь мы наслаждаемся зрелищем этих зданий, вознесенных на местах пустырей и развалин.<sup>(24)</sup>

アンドレイ・バービチェフの活動はロシア中に知れ渡っていた。それは政権の寵児で、労働者たちの崇拜的だった。彼は8棟のコミュニンの家、つまり、8棟の巨大な労働者の寮を建てた。今では、荒地地や廃墟だった場所に立てられたこれらの建物の姿が、僕達の目を楽しませている。

22 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 6, л. 10.

23 Wayne P. Wilson, "The Objective of Jurij Olesa's Envy," *Slavic and East European Journal* 19, no. 1 (1974), p. 31.

24 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 6, л. 9.

とはいえ、「文学秘書」のカヴァレーロフが、アンドレイ・バービチェフのことをニュートラルな調子で語っている草稿は少ない。執筆の過程で、カヴァレーロフの職務と、アンドレイに対する感情には変化が加えられていったようだ。次に挙げるのは、もう少し後に書かれたと思われるヴァリエーションだ。

## A-5

Мне повезло. Нашелся влиятельный знакомый, знавший меня по работе в одной из южных республик. Он рекомендовал меня строителю домов-коммун. [...] / Я считал свою должность почетной. Кроме того я получил возможность читать, иметь множество книг. Патрон хотел быть в курсе всех литературных течений. ~~Я читал~~ Так прожил я у инженера (sic) год. ~~Сознаю, что не смотря~~ (sic) ~~на то, что~~ Я перепечатывал его труды, ~~отдель~~ доклады, ~~листы и формул~~ листы формул, я слушал беседы отдельные заметки. Сознаю, ~~техи~~ эта отрасль не знаний осталась для меня темной. [...] Часто он хохотал над деталью какого-нибудь чертежа, как хохочут ~~над носе~~ ~~анек~~ ~~над выходками циркача~~ и над ~~выходками явной~~ нелепыми выходками циркача, ~~всегда~~ выкрикивал: — Анекдот! Анекдот! — и ~~потрясал чертежом~~ швырял чертеж в угол. Я ~~не~~ рассматривал чертеж, ~~и не находил причины ломал голову над и~~, ломая голову, искал причину ~~смея~~ хохота. Это был хохот профессионала, вызывавшийся ~~страх~~ и суеверный страх и зависть. [...] / Может показаться странным, что инженер ~~держал в качестве имел~~ прибил профана. / Но ~~на службе его окру он имел целых штат секретарей~~ в комитете он имел целый штат секретарей, я ~~не~~ ~~всегда~~ исполнял обязанности только литературного информатора.<sup>(25)</sup>

僕はついていた。南の一共和国での仕事で僕を知っていた、影響力ある知人が見つかった。彼は僕をコミュニケーションの家の建築家に推薦してくれた。[...] /僕は自分の役目を名誉だと考えていた。それに、僕は沢山の本を読み、持つことができるようになった。パトロンはあらゆる文学の流れに通じていたいと考えていた。こうして僕は技師のもとで1年間暮らした。僕は彼の著作や、報告書や、個別の覚書をタイプライターで打った。僕がこの知の分野に暗いままだったことを認めよう。[...] 彼はよく、何かの図面のディテールのことで、サーカス芸人のばかばかしい悪ふざけに笑うように笑い、「笑い話だ！笑い話だ！」とわめいて、図面を片隅へ押しやった。僕は図面をとくと見て、頭を悩ませながら、笑いの原因を探した。それは、迷信的な恐怖と羨望を呼ぶ、専門家の笑いだった。[...] /技師が門外漢を近づけたことは、奇妙に思われるかもしれない。/だが、委員会では、彼は秘書を定員だけ持っていて、僕は文学の情報提供者の仕事だけをしていた。

このヴァリエーションでは、「文学秘書」という言葉は使われていない。しかし、カヴァレーロフは自分の仕事を「あらゆる文学の流れに通じていたいと考えて」いるパトロンのための「文学の情報提供者」と見なし、それが、アンドレイ・バービチェフにはない知識を活かしたも

25 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 6, л. 36–37.

のであると自認している。したがって、技師の仕事については門外漢の彼でも、プライドが保たれているといえる。また、カヴァレーロフは「自分の役目を名誉だと考え」、沢山の本が手に入ることを喜んでいる。「ついていた」という言葉から伺えるように、全体として、彼は自分の仕事に満足しているようだ。とはいえ、ここまで挙げてきた草稿と比べると、変化が現れていることもわかる。彼の仕事には、文学の紹介以外にタイピングという雑務が加えられている。そして、ここではアンドレイ・バービチェフに対する悪感情が芽生えかけていることも窺える。カヴァレーロフは、アンドレイ・バービチェフの笑いを「サーカス芸人のばかばかしい悪ふざけに笑うように」と表現し、それに対して「迷信的な恐怖と羨望」を覚えている。

創作の過程で、オレーシヤは、カヴァレーロフに与えられる仕事を専門性の低いものへと変えてゆく傾向があったようだ。もっと後の段階では、カヴァレーロフの仕事から文学の紹介という内容はなくなる。その段階への移行期に書かれたと思われる次のヴァリエーション A-6 を、A-5 と比較したときに気づくのは、カヴァレーロフの仕事の内容として真先に挙げられるものが「タイプライターの仕事」と「校正」という雑務になっており、文学の紹介は最後になっていることだ。専門性を活かした仕事の優先順位が下げられている。そしてここでは、アンドレイ・バービチェフに対するスタンスにおいて、「憎しみ」という負の感情がはっきり現れている。「憎しみ」の理由として、彼は自分が「軽蔑」されていると感じるようになったことを挙げている。ここには、彼の傷つけられたプライドが見て取れる。

## A-6

На моей обязанности лежала во-первых работа на пишущей машинке, во затем ~~корректура его печати~~ коррективное его отписков его кни брошюр и третья — ознакомление его моего патрона с новинками литературы. Я ~~обязан~~ Я следил за книжным рынком, ~~еже читал~~ в составлял конспекты прочитанных книг и докладывал их инженеру. Он ~~нередко~~ останавливал свое внимание на той или иной книге <произведении> и брал у меня заинтересовавшую меня книгу. / Я возненавидел ~~его~~ инженера Андрея Бабицева. Многие ~~не~~ Он Почему? Потому что я Теперь я знаю почему. [...] Я ~~зна~~ понимал, этот большой человек каждую минуту может увидеть меня насквозь, может сказать мне, что я дурак и ничтожество — и не предпринимает ни того, ни другого, потому что относится ко мне с глубочайшим презрением. <sup>(26)</sup>

僕の義務は、第1に、タイプライターの作業、それから、パンフレットのゲラの校正、そして第3に、僕のパトロンに文学の新作を紹介することだった。僕は本の市場の動向を見て、読んだ本を要約し、それを技師に報告していた。彼はあれこれの作品に注意を向け、僕が面白いと思った本を僕から受け取った。／僕は技師アンドレイ・バービチェフを憎みだした。なぜか。今では僕はなぜか知っている。[...]僕は、この大人物がいつだって、僕のことを見通しうるし、僕は馬鹿でとるに足りないと言いうるが、それでいて、僕をととても深く軽蔑しているので、どちらもしないのだとわかっていたのだ。

26 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 91.



にでもできる雑務を行うだけの「秘書」へと格下げされたが、このことは逆に、作品の中で機能において、彼を格上げすることになった。平静を保った人物から、憎しみを抱いた人物へと変わることは、彼に、登場人物としてのより強い個性が賦与されたことを意味する。当初、カヴァレーロフの紹介に伴っていた、彼がイヴァン・バービチェフを主人公とする物語の語り手であるという表現は、アンドレイ・バービチェフを憎むという設定が登場した草稿からは消えている。つまり彼は、否定的な個性を賦与されるのと同時に、作品の中で役割の重要性を高めていき、イヴァン・バービチェフに代わる主人公へと変化していったようだ。

## 2. カヴァレーロフ像にみられる否定性の強化

カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの対立を作品に導入するにあたり、オレーシャは、カヴァレーロフを性格付けの上で格下げし、彼のプライドを傷つけるために、さらなる要素を盛り込んだ。彼がアンドレイ・バービチェフに身体を洗うよう言われるというエピソードだ。こうして、カヴァレーロフの特徴には、アンドレイ・バービチェフへの憎しみの他に、不潔という要素も付与されたが、このこともまた、彼の個性を強める結果になっているといえるだろう。

オレーシャは、このエピソードの導入を、カヴァレーロフがアンドレイを憎むという設定の導入と並行して行っている。カヴァレーロフが身体を洗うよう言われる場合、現存する全ての草稿で、彼がアンドレイを憎むという展開になっている。ただし、このエピソードが導入された当初は、身体を洗うよう言われることは、彼がアンドレイ・バービチェフを嫌い始めることの直接的な理由にはなっておらず、軽く言及される程度だった。このエピソードに関連した草稿のうち現存するもので最も時期が早いと思われる<sup>(28)</sup>、ヴァリエント B-1 では、カヴァレーロフはアンドレイ・バービチェフを憎むようになっているものの、身体を洗うよう言われたこと自体には、後に書かれたと思われるヴァリエントほど強い不快感を示していない。

### B-1 (A-6 と同じヴァリエント)

Но мой знакомый написал письмо, созвонился, условился, и в один прекрасный день в конце зимы, я покинул мои задворки, ~~кирничную~~ ~~ст~~ и поселился в квартире ~~эн~~ ~~Ин~~ инженера Бабичева. ~~Первое, что~~ / — Вам надо хорошенько помыться, — сказал он мне в ~~одну из первых бесед. Он задал мне ряд вопросов~~ через минуту после знакомства. / Он выдал мне аванс ~~е тем, чтобы пр~~ ~~я при~~ на ~~костюм и принадл~~ белье и костюм. Так началось мое благополучие. [...] / Я возненавидел ~~ев~~ инженера Андрея Бабичева. ~~Многие~~

28 詳しくは後述するが、このエピソードに関連する草稿は何度も冒頭から書き直しが行われ、様々なヴァリエントが残っており、それらと比較すると、書き直されるたびに、情景描写がより詳しくなっていたらしいことが窺われる。したがって、情景描写がより簡単なヴァリエントほど早い段階で書かれたものであると推測することができる。

**nr Он** Почему? ~~Потому что~~ я Теперь я знаю почему. [...] Я **зна** понимал, этот большой человек каждую минуту может увидеть меня насквозь, может сказать мне, что я дурак и ничтожество — и не предпринимает ни того, ни другого, потому что относится ко мне с глубочайшим презрением. <sup>(29)</sup>

だが、僕の知人は手紙を書き、電話し、話をつけて、冬の終わりのある日、僕は自分の裏手の住まいを出て、技師バービチェフの家に引っ越した。／「あなたは身体をよく洗わなければなりません」彼は知り合うやいなや僕にそう言った。／彼は下着とスーツの金を前払いでくれた。こうして、僕の平穏な暮らしが始まった。[...] /僕は技師アンドレイ・バービチェフを憎みだした。なぜか。今では僕はなぜか知っている。[...]僕は、この大人物がいつだって、僕のことを見通しうるし、僕は馬鹿でとるに足りないと言いうるが、それでいて、僕をととても深く軽蔑しているの、どちらもしないのだとわかっていたのだ。

ここでは、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフを憎むようになったのは、知り合った後に、時間を経て、自分が軽んじられているように感じ始めたからだということになっている。知り合うやいなや、カヴァレーロフは「あなたは身体をよく洗わなければ」と言われているものの、そこですぐに不快感を露わにすることはない。まずは「平穏な暮らし」が始まっている。このように、身体を洗うよう言われるというエピソードは、導入された当初は軽く言及される程度のものであった。

しかし、後にオレーシャは、身体を洗うよう言われるというエピソードを、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフを憎むようになったきっかけの1つへと変えた。そのことがわかるのが、次に挙げるヴァリアント B-2 だ。

## B-2

— Вы Кавалеров? — спросил он, как врач. / Я с отвращением почувствовал, что не имею сил бороться с подобострастием. ~~В ту же Прөизшло~~ ~~обычное~~ Я Я был очень тщеславен, но ~~мне не хватало гордости~~ моему тщеславию не хватало гордости. ~~Чтоб~~ Оно выродилось в простую хвастливость перед самим собой. / Я ~~nr~~ — Мне звонил ~~ө~~ ~~вае~~ на счет вас Чеховский, или как его? / — Чеховский. / — ~~Вы где Он~~ Вы работали у него? / — ~~Да~~ Работал. На юге. [...] / Тут он сказал совершенно неожиданно: / — Вам надо хорошенько помыться... / Я не понял, я посмотрел на руки, ~~и лицо, от в зер~~ думая, что он имеет ввиду (sic) какие-нибудь случайные пятна, но в ту же минуту, ~~мне стало яею~~ подумав об умывальнике, о половичках и дорогих лампах в вестибюле, я возмутился. / «Он, видите ли, считает меня грязным» <sup>(30)</sup>

「あなたがカヴァレーロフですか」彼は医者のように尋ねた。／僕は嫌悪を抱きつつ、自分には卑屈さに抗う力がないことを感じた。僕はととても見栄っ張りだったが、僕の見栄には誇りが足りなかった。見栄は自分自身に対する単なる高慢に変質した。／「チェーホフスキー

29 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 91.

30 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 69–71.

という名前の方でよかったですか、あなたに関して電話をもらいました」。／「チェーホフスキーです」。／「彼のもとで働いていたのですか」。／「そうです。南で」。[…]／ここで、全く思いがけず、彼は言った。／「あなたは身体をよく洗わなければ…」。／僕は理解に窮した、僕は、彼が何かたまたまついていた汚れのことを言っているのだらうと思いつながら、両手を見たが、その時、洗面台や、玄関の敷物と高価な電灯のことを思って、腹が立った。／「彼はね、僕を汚いと思っているのですよ」

ここでは、カヴァレーロフは、自己紹介の段階で既に、アンドレイ・バービチェフに悪感情を抱いているが、それをさらに強めることとなったのが、身体を洗うようにというアンドレイの発言だ。その発言によってカヴァレーロフが深くプライドを傷つけられたことが、「彼はね、僕を汚いと思っているのですよ」という言葉から伺える。

このエピソードは書き直されるたびに情景についての記述が詳細になっていったようだ。ヴァリエント B-1 では、「『あなたは身体をよく洗わなければなりません』彼は知り合うやいなや僕にそう言った」という一文があるだけで、詳しい情景描写はなかった。しかし、ヴァリエント B-2 では、引用箇所の後続するシーンにおいて、カヴァレーロフは実際にその場で、アンドレイ・バービチェフに促されて身体を洗うことになっている。オレーシャは、軽く言及する程度だった逸話を、もっと膨らませることにしたようだ。このことによって、カヴァレーロフに与えられる屈辱はさらに強まっているといえるだろう。

そしてここで、存在感のある舞台装置として登場することになるのが、カヴァレーロフが身体を洗う洗面台だ。この主人公は語り手となって、それを裸の女という、思いがけない印象を与えるものに喩えている。以下では、洗面台の描写を手掛かりに、情景描写が執筆の過程でより詳しくなっていくことを検証しつつ、このエピソードに関するオレーシャの構想がどのように推移していったかを見ていこう。ヴァリエント B-2 では、先に引用した箇所に断続的に後続して、次のような一節がある。

## B-2

Яркая афиша, голубой ~~цвет~~ полосы, пестрота афиш, похожих на флаги — или автомобиль, пристававший к ~~афишам~~ подъездам; аккуратная, деловитая нарядность женщины — такие вещи, из призраки этой жизни, мелькавшие ~~для~~ мимо, раздражали меня и унижали. / ~~Цвет~~ Такой же вещью был умывальник, похожий на женщину, обыкновенный для всех людей умывальник в доме инженера Бабичева. Таким же призраком был сам инженер.<sup>(31)</sup>

けばけばしい広告、旗のような広告の水色の縞や雑多な色、あるいは、車寄せに止まった自動車。女の几帳面で生真面目な装い、そういったもの、傍らでちらつくこの生活の幻影が、僕を苛立たせ、貶めた。／同じようなものが、女に似た洗面台、誰にとってもありふれた、技師バービチェフの家にある洗面台だった。同じような幻影が、技師本人だった。

31 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 79. голубой полосы の箇所はオレーシャの書き間違いで、初め голубой цвет と書いてから、голубые полосы に改めようとした際に、голубой を複数形に変えるのを忘れてしまったものと考えられる。

この段階で、草稿の頁には洗面台が現れ、それは「女に似た洗面台」という表現で描写されることとなった。

もう少し後に書かれたらしいヴァリエントで、オレーシャは「裸の」«голая»という形容詞を付け加え、「裸の女に似た洗面台」と改めている。また、洗面台の付属品である石鹸についても言及するようになった。

### В-3 (А-7と同じヴァリエント)

Я ненави́дел моего́ благоде́теля. В пе́рвый же́ день, то́лько я прише́л к нему́, е́два уви́дев меня́, он за́ставил меня́ помы́ться. Я вез ~~И-я-сов я худой, как канатный плясун~~ И боя́вшийся воды́, как ко́т, я соверша́л омове́ние над умыва́льником похо́жим на голу́ю же́нщину, хвата́ясь за мы́ло, как за ро́зовый язы́к.<sup>(32)</sup>

僕は自分の恩人を憎んでいた。最初の日、僕が彼のところへ行くとすぐ、僕を見るやいなや、彼は僕に身体を洗わせた。僕は そして、猫のように水を恐れる僕は、バラ色の舌を掴むように石鹸を掴んで、裸の女に似た洗面台の上で身体を洗いとげたのだった。

ところで、身体を洗うよう言われるものの、アンドレイ・バービチェフの目の前で実際に身体を洗うという展開がまだ導入されていなかったヴァリエント В-1 が書かれた頁には、カヴァレーロフを「文学秘書」とする記述が含まれている。他方、ここでヴァリエント В-3 として挙げた一節を含む頁には、彼を「秘書」としている記述がある。このことは、執筆の過程で、カヴァレーロフが「文学秘書」から「秘書」へと変わっていったことを裏付けている。つまり、オレーシャはカヴァレーロフの職業面での格下げを、アンドレイ・バービチェフの面前で身体を洗わせられるという屈辱的なエピソードの発展と同時に進めていったのだ。こうしたことから、オレーシャが両者の対立を導入するにあたり、カヴァレーロフを意識的に格下げしていったことがわかる。

さて、執筆が進むにつれ洗面台の描写はさらに詳しくなっていったようだ。続いて書かれたと思われるヴァリエント В-4 を、次に示す。

### В-4

Ощуще́ние униже́нности и жела́ние не усту́пить ему́, ~~не изменить~~ не подда́ться подо́б-стра́стью (sic) е́ще бо́лее уси́лилось, ко́гда меня́ впу́стили в ква́ртиру, прове́ли по ~~корри~~ ко́вру ко́рридо́ра ~~мимо~~ ~~блески~~ и оста́вили одно́го в ко́мнате. ~~Зде́сь я е́го~~ Я се́л на ко́жаный, хо́лодный ди́ван. ~~Первы~~ ~~Сразу~~ Сра́зу же́ мое́ ~~внимание~~ ~~привлек~~ ~~привлек~~ умы́ва-льни́к. ~~Он блиста́л ме~~ Зе́ркало ~~низ~~ ~~привинчен~~ное над ни́м, отража́ло све́т си́льной, ни́зко укре́пленно́й ла́мпы. Умы́ва́льни́к блиста́л мо́лочным бле́ском, и не́жной, же́н-ственно́й вла́жно́стью. ~~Он походи́л на~~ Я А ~~э́тот раз~~ ~~мне ста́ло я́сно,~~ ~~что~~ Мне ста́ло я́сно, что́ умы́ва́льни́к все́гда́ похо́ж на голу́ю же́нщину. Ка́к ро́зовый язы́к, то́рчало́ мы́ло.<sup>(33)</sup>

32 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 6, л. 33об.

33 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 68.

住まいに通され、廊下のカーペットの上を案内され、部屋に一人残された時、屈辱感と、それに負けたくない、卑屈になりたくないという思いは、より一層強まった。僕は革の冷たいソファに座った。すぐに、洗面台が僕の（注意を — 論者）引きつけた。その上にねじで取り付けられた鏡が、明るい、低い位置に固定された電灯の光を反射していた。洗面台は、乳白色のつやと、優しい女性的な潤いで輝いていた。僕は、洗面台がいつでも裸の女に似ていることに気づいた。バラ色の舌のように、石鹸が突き出していた。

それまでは、「裸の女に似た洗面台」という表現にとどまっていた洗面台の描写が、ここでは「洗面台は、乳白色のつやと、優しい女性的な潤いで輝いていた。僕は、洗面台がいつでも裸の女に似ていることに気づいた」という、より詳しい表現に変わっている。それと同時に、「バラ色の舌を掴むように石鹸を掴ん」だという表現は、「バラ色の舌のように、石鹸が突き出していた」という表現に変更されている。また、ここでは洗面台の上に取り付けられた鏡についても触れられている。

ところで、洗面台の描写に着目して草稿の諸ヴァリエントを比較していくと、カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いのエピソードにおいて、出会いのきっかけがどのようにして、当初の知人の紹介によるものから、酔って倒れているところを助けられたというものに変化したのかも伺うことができる。ヴァリエント B-4 が書かれている紙は、表裏両面に書き込みがある。オレーシャが、ヴァリエント B-4 と同じ面で、先に挙げたシーンに先立って書いたのは、カヴァレーロフが知人の紹介で初めてアンドレイ・バービチェフに会うという内容だ。

#### B-4

(Дне)м, от которого нужно начинать счет остальным дням, первым малозначущим (sic) слагаемым в удивительной сумме ~~многих дней~~ <дней> того времени, я считаю тот день, вернее вечер, прекрасный вечер в начале лета, когда я, ~~приготовив~~ ~~ре~~, молодой человек, пришедший по рекомендации влиятельного знакомого, переступил порог дома, где хозяином был знаменитый инженер Андрей Петрович Бабичев, ~~ещ~~ строитель домов-коммун.<sup>(34)</sup>

それ以降の日々を数え始めるにあたっての起点の日、つまり、度肝を抜くような、当時の日々の総計における、1 番目の、さして重要でない構成要素と、僕が見なしているのは、影響力ある知人の紹介で来た僕という若者が、コミュニンの家の建築家の、有名な技師アンドレイ・ペトローヴィチ・バービチェフの家の敷居を跨いだ日、正確には夕刻、つまり、夏の初めのある夕刻だ。

その一方、ヴァリエント B-4 が書かれた紙の裏面にも、カヴァレーロフが初めてアンドレイ・バービチェフと出会うというエピソードが記されている。これをヴァリエント B-5 としよう。

34 Там же. 冒頭の 1 語は頁が破損していて м の一文字しか残っていないが、裏面の類似した文章から判断して、днем であったと思われる。

興味深いのは、ヴァリアント B-5 では、出会いの経緯が、カヴァレーロフが酔って倒れているところをアンドレイ・バービチェフに助けられるというものに変わっていることだ。

#### B-5

Днем, от которого нужно ~~счит~~ начинать счет ~~остальным всему этому~~ в остальных дням, я считаю тот день, вернее вечер, прекрасный вечер в начале лета, когда меня, пьяного, подобрал и увез на автомобиле к себе незнакомый мне, но известный ~~не только мне, а~~ в и мне и всей ~~России~~ в стране Москве инженер Андрей Петрович Баби́чев, строитель домов-коммун.<sup>(35)</sup>

それ以降の日々を数え始めるにあたっての起点の日と、僕が見なしているのは、酔った僕が、面識はないが、僕もモスクワ中も知っている、コミュニンの家の建築家の、技師アンドレイ・ペトローヴィチ・バービチェフに拾われた日、正確には夕刻、つまり、夏の初めのある夕刻だ。

ヴァリアント B-1 から B-3 (A-7) までは、カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いのきっかけは知人の紹介になっていた。それに対し、ヴァリアント B-4 と B-5 では、紙の表と裏で、出会いのきっかけが異なっている。したがって、ヴァリアント B-5 を書いた時点で、オレーシャは、カヴァレーロフがアンドレイと知り合ったきっかけを、酔って倒れているところを助けられるというものに変えたものと推測される。こうした出会いのきっかけの変更により、カヴァレーロフは性格付けの上でより格下げされることとなった。

オレーシャは、両者の出会いの経緯を変えた後も、しばらくの間、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフに身体を洗うよう言われるというエピソードを残しておいたようだ。ここでヴァリアント B-6 として、酔って意識を失っていたカヴァレーロフが、アンドレイ・バービチェフの家で気づくと、身体を洗うよう言われるという内容のものを挙げよう。

#### B-6

Воспоминания распалагаются путаной колодой карт. Кропотливо я отыскиваю ту, от которой нужно вести счет. Вот она, — это то вечер в начале лета, когда я меня, пьяного, ~~нед~~ подобрал у порога пивной незнакомый мне но известный не только мне но и всей Москве, ~~Ан~~ инженер Андрей Петрович Баби́чев, строитель домов-коммун. / Меня выгнали из пивной. Какой-то мужчина, незапомнившийся, проплывший по пьяным глазам, как неясное отражение в воде, вытолкал меня за то, что я сказал непозволительно нежные слова даме, которую он угощал. Я упал лицом на решетку подвала. [...] Потом я спал, ~~сквозь сон, сознавая верочание сбоку на бок~~ сколько прошло времени — не знаю; ~~ощувши~~ я первым впечатлением установившегося сознания был ~~ени~~ огонь зеркала, отражавшего низко укрепленную сильную лампу. Там стоял умывальник. Я лежал на кожаном холодноватом диване. Глядя на умывальник, на его молочный блеск и нежную влажность, я подумал о схотстве его с голой женщиной. ~~Как розовый язык леж~~ Как ро-

35 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 68об.

зовый язык, торчало ~~во мраморной ложбине~~ мыло. / — Вам надо хорошенько помыться, — сказали надо мной. / Я ~~подняле~~ приподнялся. В голове качнулась муть. Передо мной стоял Андрей Бабичев.<sup>(36)</sup>

記憶はごちゃ混ぜになったトランプのように散らばっている。注意深く、僕は、そこから数えはじめるべき1枚を探している。ほらこれだ、それは、酔った僕が、ビヤホールの敷居のところで、面識はないが、僕ばかりかモスクワ中が知っている、コミュンンの家の建設者の、技師アンドレイ・バービチェフに拾われた、夏の初めの夕刻だ。／僕はビヤホールから追い出された。よく思い出せない、水面に映った朧な影のように酔った視界を漂い過ぎたどこかの男が、奢ってやっていた女に僕が何か許しがたいほど優しい言葉をかけたということで、僕を追い出したのだ。僕は地下室の格子に顔を向けて倒れた。〔…〕それから僕は眠り、どれほどの時が経ったかわからない。意識が戻って最初に印象を受けたのは、低い位置に固定された明るい電灯を映し出す鏡の火影だった。そこに洗面台があった。僕は革のひんやりしたソファーに横になっていた。洗面台を、その乳白色のつやと、優しい潤いを見ながら、僕は、洗面台は裸の女に似ていると思った。バラ色の舌のように、石鹸が突き出ていた。／「あなたは身体をよく洗わなければなりません」僕の上方で声がした。／僕は身を起こした。ぼんやりした頭の中が揺れうごいた。僕の前にアンドレイ・バービチェフが立っていた。

ヴァリエント B-6 では、洗面台と石鹸の描写は、ヴァリエント B-4 にあったものとさほど変わらないものの、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフの家へ連れてこられるまでの経緯が導入され始めている。ヴァリエント B-5 では「酔った僕が」「拾われた」としか書かれていなかったが、ヴァリエント B-6 では、いざこざを起こしてビヤホールを追い出されたことに言及されるようになっていく。ビヤホールを追い出されるエピソードは、公刊されたテキストにも含まれているが、その起源はこのヴァリエントの時点にあるということができそう。

さて、これまで見てきたような、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフの元を訪れるやいなや、両者の対立が顕在化するという構想は、ヴァリエント B-6 が書かれた後に途絶えたものと思われる。オレーシヤは後に、両者の出会いのエピソードにもっと別の方向からアプローチすることに変えたようだ。執筆の最初の5年間の中でも、もっと後に書かれたと思われる草稿では、酔って倒れているところを連れてこられたカヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフの家で目覚めた時点で、主人は隣室で眠っていることになっており、その設定が、「完全な草稿」および公刊されたテキストへと引き継がれることになった。こうして、カヴァレーロフがアンドレイ・バービチェフに身体を洗うよう言われるというエピソードもまた、何度も推敲が繰り返され、執筆の一過程では重要な意味を持っていたにもかかわらず、公刊されたテキストには含まれないこととなった。とはいえ、このエピソードに取り組むプロセスで進行していったカヴァレーロフの格下げは、公刊されたテキストにも反映している。身体を洗わせられるほど不潔な人物であるという性格付けこそなくなったが、酔って倒れているところを連れてこられるというエピソードは、公刊されたテキストでも用いられることになった。

36 РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 87.

## おわりに

ここまで、カヴァレーロフとアンドレイ・バービチェフの出会いのエピソードにまつわる比較的初期の様々なヴァリエーションの検証を通じて、オレーシャが、『羨望』にカヴァレーロフを導入し、バービチェフ兄弟の間に成立するだけだった二項対立図式を、彼を巻き込んだより複層的なものに変えていったプロセスを明らかにしてきた。オレーシャは出会いのエピソードを何度も書き直し、カヴァレーロフ像を効果的に格下げしていくことで、彼のプライドを傷つけ、アンドレイ・バービチェフとの対立を先鋭化させていった。カヴァレーロフは、当初、作中での機能の面では、主人公でなく、イヴァン・バービチェフを主人公とする物語の語り手であり、性格付けの面では、知人の紹介でアンドレイと知己を得た「文学秘書」だった。このようなカヴァレーロフ像に、オレーシャは否定的な特性を賦与していった。彼の仕事は、文学に詳しい知識人としての専門的な能力を活かした「文学秘書」から、雑務をこなすだけの「秘書」へと変えられていった。出会うやいなや、アンドレイ・バービチェフに身体を洗うよう言われるほど不潔であるという特徴も与えられるようになり、やがてそこには、彼が実際にアンドレイ・バービチェフの面前で身体を洗うという、より屈辱的なシーンが付け加えられた。また、出会ったきっかけも、知人の紹介から、酔って倒れていたところを助けられ、家に連れてこられるというものに変えられた。こうした性格付けの変化から、カヴァレーロフはアンドレイ・バービチェフに対して自分の尊厳を保つことができない人物になり、それを理由として、彼を憎むという設定が導入された。

このようなプロセスを通じて、カヴァレーロフは導入された当初よりも強い個性を獲得すると同時に、作品の根底にある対立構造の中心に躍り出た。結果的に、『羨望』の主人公はイヴァン・バービチェフから彼に変わるようになったのだ。

本稿が行ってきた検証から、「完全な草稿」ひいては公刊されたテキストは、執筆の最初の5年間に行われた試行錯誤の結果を基盤にして書かれたものであるということが出来る。『羨望』が、カヴァレーロフを主人公とし、彼とアンドレイ・バービチェフの対立を中心とした二項対立図式の構図のもとに成り立つ作品になっているのは、本稿が扱った執筆の段階でオレーシャが作り上げていった設定を反映してのことだ。また、公刊されたテキストのカヴァレーロフ像に付された、酔って倒れているところをアンドレイ・バービチェフに助けられ、雑務をこなすだけの「秘書」として働くことになるという性格付けも、この時期に作り出された。執筆の最初の5年間に書かれた頁は、たしかに、公刊されたテキストを構成するものにはならなかった。しかし、この時期の作業の結果は、人物名や、比喩や、個々の場面といった断片的な要素として公刊されたテキストに盛り込まれただけでなく、その方向性の本質的な部分を定めているのだ。

その一方で、公刊されたテキストのカヴァレーロフ像が、アンドレイ・バービチェフと対立する格下げされた登場人物という設定を反映しつつも、「芸術家」<sup>(37)</sup>や「詩人」<sup>(38)</sup>という肯定的イメージに結び付けて捉えられうるものになっていることにも、注意を向ける必要

37 D. G. B. Piper, "Yuriy Olesha's 'Zavist'," *The Slavonic and East European Review* 48, no. 110 (1970), p. 28.

38 Белингов А. Сдача и гибель советского интеллигента. Юрий Олеша. М., 1997. С. 212.

があるだろう。オレーシャもまた、第1回ソヴィエト作家大会の演説で、同時代の文壇で上がっていたカヴァレーロフを批判する声に対し、そうした肯定的イメージに結びつけてこの人物像を弁護するかのような発言を行っている。「芸術家として、私はカヴァレーロフに、もっとも純粋な力、初めての事物の力、初めての印象を語り伝える力を現しました。すると、カヴァレーロフは俗物でとるに足りない人物だと言われました。[...] 私は信じられず、身を隠しました。新鮮な注意力と、世界を自分のやり方で見える能力を持つ人物が、俗物で、とるに足りない人物でありえるなんて、私には信じられませんでした」<sup>(39)</sup>。初期草稿の執筆プロセスの中で、カヴァレーロフを格下げし、「とるに足りない」<sup>(40)</sup>人物にしていたのは、オレーシャ自身だったにもかかわらず、彼は、カヴァレーロフを「とるに足りない」人物であるとする批判に違和感を覚えたとしているのだ。

この発言からわかるように、公刊されたテキストでのカヴァレーロフの役割において、オレーシャは、新鮮な観点から作品世界を物語るという点を特に重視していたようだ。カヴァレーロフが世界に向ける新鮮な眼差しは、もちろん、初期草稿の時点で既に見受けられる。本稿の第2節で検証した、洗面台に裸の女との類似を見いだす、意表をついた情景描写はその好例といえるだろう。とはいえ、そうした肯定的な側面を持ちつつも、それ以上に否定的側面の強化が重視されていたのが、初期草稿の段階だった。他方、オレーシャの発言から窺えるように、公刊されたテキストについての彼の見方では、この肯定的側面が、カヴァレーロフの特徴として真っ先に挙げられるものとなっている。人物造形における設定の多くにおいて、執筆の最初の5年間に作られたものが引き継がれているとはいえ、新鮮な視点を持った語り手としての役割を重視する観点から作られているのが、「完全な草稿」ひいては公刊されたテキストのカヴァレーロフ像だといえることができるだろう。

カヴァレーロフ像におけるこうしたアクセントの変化は、導入された当初は、それ自体を目的とするものではなかったようだ。執筆の最初の5年間の中でも後期の、「完全な草稿」の直前の時期に書かれたと思われる、コースチャ・ベロフが登場するヴァリエーション群では、文章表現が従来に比べ緻密さを増し、斬新な比喩がより多用されるようになった形跡がある。このヴァリエーション群には、3人称で書かれているものと、カヴァレーロフの1人称の語りで書かれているものがあるが、そうした傾向はどちらにも当てはまる。つまり、この時期にオレーシャは、『羨望』の言葉全体を見直し、新鮮な視座による情景描写を前面に打ち出すことにしたようだ。そしてその変化は当然、1人称の語り手であるカヴァレーロフの言葉、ひいては世界へ向ける眼差しに反映した。こうしてカヴァレーロフは、世界を新鮮な視座から捉える人物へと変わったものと思われる。

本稿が検証してきたように、カヴァレーロフ像は、度重なる大きな変遷を経て、公刊されたテキストにあるような姿になった。こうした主人公像の不安定性からは、オレーシャが、予め人物の明確な性格づけを行うことのないまま創作を行っていたことが伺える。『羨望』は刻一刻と変化を続ける流動的な傾向が強い物語だったのだ。

39 Олеша Ю.К. Зависть; Три Толстяка; Воспоминания; Рассказы. М., 2013. С. 57.

40 この表現はヴァリエーション A-6 (B-1) の中で、オレーシャ自身が、カヴァレーロフを表すものとして用いているのと同じものだ。РГАЛИ, ф. 358, оп. 2, ед. хр. 8, л. 91.

## История создания сцены встречи Кавалерова с Андреем Бабичевым в произведении Ю. Олеси «Зависть»

Комия Митико

Данная статья посвящена истории создания эпизода встречи главного героя Кавалерова с Андреем Бабичевым в произведении Юрия Олеси «Зависть». Среди самых разнообразных фрагментарных эпизодов из рукописей этого произведения, хранящихся в Российском государственном архиве литературы и искусств (РГАЛИ), этот эпизод имеет особенно много вариантов.

Ю. Олеша писал «Зависть» с 1922 г. до июня 1927 г., после чего опубликовал ее в журнале «Красная новь» (№ 7–8). Период написания условно делится на две части: первые пять лет и последующие полгода. Рукописи, написанные за первые пять лет, отличаются фрагментарностью, кроме того, автор неоднократно заново их переписывал. В них содержатся многочисленные отрывочные эпизоды, и почти каждый эпизод написан в нескольких разных вариантах. В последние полгода написания «Зависти» Ю. Олеша изменил логику работы над произведением. С февраля до июня 1927 г. он работал над так называемым «Полным черновиком Зависти». Мы полагаем, что в этом черновике не содержится фрагментарных эпизодов. Автор писал его последовательно от начала до конца, в итоге создав текст, близкий к опубликованному варианту, больше не переписывая одни и те же сцены по несколько раз. Предметом анализа данной статьи являются рукописи, написанные за первые пять лет.

Исследователи отмечают, что в основе «Зависти» лежит противопоставление двух групп героев: группа со старым, дореволюционным мировоззрением (Николай Кавалеров, Иван Бабичев, Анечка Прокопович) и группа с новым советским мировоззрением (Андрей Бабичев, Володя Макаров, Валя). При этом центральными фигурами этого противопоставления являются Кавалеров и Андрей Бабичев. Ю. Олеша много раз переписывал эпизод их встречи. В процессе переписки этой сцены постепенно менялись образ главного героя, обстоятельства, при которых он действует.

В самом первоначальном замысле Ю. Олеси Кавалеров не только не являлся главным героем, его вообще не было в произведении. Изначально главным героем «Зависти» был Иван Бабичев — брат Андрея Бабичева. Затем Кавалеров появился в этом произведении, но не как главный герой, а как рассказчик истории Ивана Бабичева. Далее в процессе написания автор постепенно изменял его роль в произведении. В первоначальных вариантах черновиков Кавалеров встретил Андрея Бабичева благодаря рекомендации знакомого. Будучи представителем интеллигенции, Кавалеров работал у Андрея Бабичева «литературным секретарем»: знакомил его с новейшей литературой. В это время он хорошо относился к своему патрону. В этом контексте образы Кавалерова и Андрея Бабичева не были противопоставлены друг другу. Однако в последующих вариантах автор изменил специфику работы Кавалерова: теперь это были мелкие дела, которые не требовали высокой квалификации. Такая работа оскорбляла Кавалерова, и он начал ненавидеть Андрея Бабичева. Изменились и обстоятельства их встречи. В новых вариантах эпизода Андрей Бабичев нашел Кавалерова, лежавшего на улице в пьяном виде, пожалел и привел его в свой дом.

Кроме того, Ю. Олеша добавил эпизод, в котором Андрей Бабичев приказал неопрятному Кавалерову помыться. Таким образом, в плане характеристики персонажа автор перевел Кавалерова в низший разряд. Тем не менее, придав ему отрицательные качества, Ю. Олеша усилил личность этого персонажа, что обусловило повышение значимости его роли в произведении. Кавалеров постепенно стал главным героем «Зависти».

Как отразилась на опубликованном тексте эта многократная переписка некоторых сцен? В первую очередь, «Зависть» стала произведением о противопоставлении двух групп героев, центральными фигурами которого является Кавалеров и Андрей Бабичев. Эта структурная основа была создана на том самом этапе написания романа, который рассмотрен в данной статье. Во-вторых, многократная переписка сказалась на конечном образе Кавалерова. Он встретился Андрею Бабичеву в пьяном виде, занимался при нем мелкими делами, ненавидел его. Таким образом, результаты работы, проведенной в течение первых пяти лет, нашли отражение в окончательном варианте романа не только в его отдельных фрагментарных элементах, но и определили его общую направленность.

Тем не менее, роль Кавалерова в «Полном черновике Зависти» в некоторой степени отличается от его роли в ранних вариантах. Как мы рассмотрели выше, за первые пять лет написания романа Олеша перевел его в низший разряд, постепенно сделал его «ничтожеством». Однако в образе Кавалерова в «Полном черновике Зависти» автор придал большое значение роли этого героя как повествователя, видящего мир по-своему. В этом заключается основное отличие между ранними вариантами черновиков произведения и «Полным черновиком Зависти».